



●小高い山の中腹を切り開いてつくられた農地では、要さんがジャガイモを収穫していました。ジャガイモの後は、小豆、大豆、ビートと収穫作業が続きます。



●牧草ロールや農業機械などが取られたビニールハウス。ジャガイモの芽出しや選別など、多目的に利用しています。

# 明日を語ろう！ 北の農業人

KITANO NOUGYOUBITO



北海道農業に限りない愛情を注ぎ、  
たゆまぬ努力を続ける人々がいます。  
農業の未来を創造する「北の農業人」の  
情熱や取り組みをご紹介します。

●多角的な農業経営と先進的な視点で時代に対応する

**栽培体系の工夫と改善を重ね、  
地域の特産品を守り続ける。  
倶知安町の未来も見据えながら  
魅力ある農業の姿を目指したい。**

「倶知安町」  
山田勉さん



## 抵抗性品種の導入で 男爵イモの生産を維持

羊蹄山の麓に広がる倶知安町は、ジャガイモの一大生産地として発展してきました。なかでも、長い栽培の歴史を持つ男爵イモは食味と風味の良さから人気が高く、町の特産品にもなっています。

出雲地区で農業を営む山田勉さんは、総面積65ヘクタールという広大な農地で、ジャガイモを中心に大豆や小豆、小麦、ビートなどを生産。後継ぎである三男の要さんと2人でほとんどの農作業をこなす。効率性や収益性を高める農業経営に取り組んでいます。

10月初旬に訪ねた山田さんの畑では、例年よりやや遅れてジャガイモ収穫が



●現在は農家の4代目として汗を流す傍ら、倶知安町議会議員としても活動する山田さん。「外国人観光客のブームが去った後までを見据えて、地域の農業や観光を考えることが大切だと思います」

行われていました。ここ数年、山田さんは「とうや」を中心に栽培。倶知安産ジャガイモの代名詞にもなっている男爵イモですが、ジャガイモシストセンチュウに弱いため、病害虫への抵抗性が高い品種も積極的に導入してきました。

「昭和60年前後から男爵イモのセンチュウ被害が多くなり、キタアカリに切り替えていったのですが、肉質が柔らかく傷が付くやすいのが難点でした。キタアカリの後に小麦を植えることでセンチュウを増やさないようにしていましたが、栽培体系に合わなかったため、早生で病害虫にも強いとうやにシフトしました」

新たな品種の導入は男爵イモの生産を維持するためでもある、と山田さんは言います。「病害虫に弱く、栽培に手間がか

## 畑作と畜産を両立する 複合的な農業経営

山田さんが手がけるもう一つの事業が素牛（もとうし）の生産です。1976年に黒毛和種5頭の飼養からスタートしました。「当時はまだ黒毛和種の素牛生産農家は少なく、事業開始は早い方だったと思います」と振り返ります。

現在は14ヘクタール弱の牧草地で飼料の大半を賄い、安定的に素牛を生産、出

## 未来志向で考える 地域と農業の可能性

山田さんは農業を通して地域に貢献することも重要だと考えています。例えば、倶知安町はジャガイモの産地なのに、地元産のジャガイモがあまり流通していませんでした。そこで、町内の市場に卸すようにしたところ、とても喜ばれたそうです。また、近年は山側のエリアでホテル建設などのリゾート開発が進んでいることから、旅行者向けのアクティビティとして農場体験ができたら面白いのでは、イベントで農産物や黒毛和牛のPRもしてみたい、とアイデアは尽きません。

倶知安町では離農する人が比較的に少なく、新規就農者もいることから、農業規模は維持できていますが、高齢化は着実に進んでいます。6次産業化などに取り組む人も少なく、これからは地域や人、産業とつながりながら農業の新しい魅力づくりにも取り組むことが重要、と山田さんは未来への思いを語ります。

「人に喜んでもらえる、笑顔を見られるのが農業という仕事。それが私のポリシーだし、農業を続ける活力にもなっています。倶知安町で引き継がれてきた文化や歴史的背景などの多様な価値観を大切にしながら、未来に続く農業の可能性を考えていきたいと思っています」



●肉用牛の素牛生産も手掛ける山田さん。将来的には町内で肥育までを一貫して行い、倶知安町の特産品の一つにできれば、というビジョンも持っています。



●地中から掘り起こしたジャガイモを、ハーベスタの上でベテランのパートさんたちが鮮やかな手さばきで選別していきます。



●離農地や農地開発で拓かれた土地を買い足し、65ヘクタールまで農地を拡大。地力のない土地には牛ふんから作った堆肥を活用するなど、土壌改良にも取り組んできました。